



光永 正治さん

成果を要求するのではなく、長期的に見守ってくれているので、腰を据えて研究に専念できます。

# 世界をまたにかけ 研究活動。

## 本場アメリカで物理学を学ぶ

私は、京大で物理学を専攻しましたが、大学院を出て、物理学の本場アメリカで勉強してみたいと思いました。もちろん、専攻分野の力を試すというだけでなく、語学力も身につけたかったし、武者修行をしたかったというのが本音でしょう。そういうことで五十四年に博士課程を終えると同時に、カリフォルニア大学バークレー校物理学部に留学しました。

留学中に感じたことですが、日本

人は同族意識が強く、群れたがる傾向があるように思います。カリフォルニア大学でも、日本人は将来必ず日本に帰ることを考えています。語学に堪能なインド人や中国人は、香港あたりから来て祖国に帰ろうとは毛頭考えない。アメリカで結婚し、一生を終えようと思っている。祖国とアメリカの生活レベルの差といえばそれまでですが、日本は、



一昨年、卒業後IBMに就職しました。IBMが私と同じ分野の研究をしている会社で、その研究所が世界に三つある。そのうちの二つがシリコンバレーの中でも最南端のサン・ホセにあって、大学に大変近い。しかも教授とIBMのトップがたまたま懇意であったこともあって私の就職先が決まりました。

海に囲まれていて、陸続きの国のように互いに影響し合う経験を持たない。だから民族的にホモジニアス(同質)なんですね。他の民族と結婚するとか、その社会に溶け込むとかそういう気持ちが少ないような気がします。日本人は語学に弱いといわれるのも、民族的な素質の問題ではなく、目的意識の問題ではないでしょうか。

私のような就職例も少なくありませんが、多くの学生は、校内掲示板から自らの就職先を探します。これは日本の大学とあまり変わりません。昨年の夏休み日本へ帰った折、NTTから同社への転職打診がありました。IBMへの就職がポストドックという短期契約であったこともあって、この申し入れを受けました。今は、落ちついて研究できますし、



大変満足しています。現在では東京に住んでいますが、別に東京でなければならぬ必要は全くありません。私の専門分野をもつ研究所さえあれば熊本の方がむしろ住みやすいのではないのでしょうか。

とにかく熊本の人には頑張ってもらいたいですね。特に若い人には冒険をして貰いたいと思います。外国へ行くというのも一つの方法でしょうし、色々な事にトライしてみても、その中から自分に合ったものを見つけて、大いに活躍して欲しいですね。

＜プロフィール＞

光永正治 昭和二十八年三月一日生まれ。慶徳小学校、藤園中学校、熊本高等学校を経て昭和四十六年京都大学理学部入学。修士課程、博士課程を終えて五十四年カリフォルニア大学(バークレー校)物理学部に入学。五十八年同校卒業と同時にIBMに入社。二年間勤務の後、本年四月NTTに転職。現在に至る。

# 大徳寺和尚立花大亀師に聞く

「死ぬるも生まれるも同じじゃ」、「おのれを生かし人を生かす」、「利休に帰れ」などの著書でおなじみの立花大亀師が、講演のため来熊されたのを機に、その豊富な人生経験と、これに基づく卓抜な人生訓をホテルに訪ねてお聞きしました。

＜プロフィール＞

明治三十二年、堺市に生まれる。早く仏法に帰して、十五、六才の頃より天台教学を志し、家を顧みず、仏事に耽溺する。堺市南安寺で出家、その後、岐阜県正眼寺に修業僧として入り、三十二才で、乞われて大徳寺内徳禪寺の住職となる。昭和二十八年より、寺務総長として大徳寺経営に携わり、二期六年務めた後、顧問として現在に及ぶ。同四十八年、大徳寺内に如意庵を再興して、同庵に住む。五十五年、奈良県に松源院を建立。同五十七年、四月より花園大学学長に就任し、現在に至る。古都保存法による、歴史的風土審議会委員を八年務める。

▼禅に興味をもつ外国人が意外と多いのですが、何がそうさせるのでしょうか。

▲結論から言いますと、自然願望が原因です。実は、奈良のお寺で留守番をさせている男に、ジョン・トラーというアメリカ人がいます。五年前、大徳寺に飛びこんで来よつ



きく表

現した

のが神で

あったり、天

国だったりする

んだ」と言いました

ら喜んで帰りました。

▼お若い頃、修業僧仲間から総すかんを食ってインドへの探究の旅に出られたとか。人生で、淋しく、情けなくなるトラブルに遭遇して、つぶれる人と、これを踏み台にして大きく成長する人がいます。先生は、後者だったから今日がある……。

▲私は、この世の中に絶対の幸福、絶対の不幸などは無いと思う。不幸が即ち幸福であったり、実は幸福が不幸であったりする。要は、その人の取り上げ方にある。心の問題なんです。私の場合、そこまで深く考え

てのことはなかった。たまたまそうなった。私は大変に恵まれたと今は感謝しております。それ以後も、今現在でも幾多の失敗をします。「あんなことするんやなかった」と。しかし、「そやから人間なんだ」といつもひっくり返して考えています。私の失敗物語も「決して失敗ではなかった」と私は、自分を偽らずに言えます。